

昭和51年度演習林年報

<https://doi.org/10.15017/18564>

出版情報：年報（九州大学農学部演習林年報）。1976, 1977-12-20. 九州大学農学部附属演習林
バージョン：
権利関係：



は し が き

「演習林年報」を出すから、「はしがき」を書けとのことである。「どんなことを書きますか」尋ねたところ、「おまかせする」との返事がかえってきた。引き受けはしたものの、さてなにを書けば良いであろうか。

昨年、前林長の宮島先生が書かれた「演習林年報」創刊号をとり出して、その「はしがき」を読ませていただいた。そこでは「演習林報告」、「演習林集報」および「演習林年報」の関係がはっきりと位置づけられ、年報では従来の「研究経過報告」に加えて、「演習林業務の概要」を併せ記録するとされている。これによって各地方演習林相互の連絡がよくなり、研究や業務の推移が明らかになるとともに、職員相互の協調に役立つと期待されている。

いま年報の研究経過報告にしぼって、研究者と研究テーマの関係をみてみよう。研究者がむやみと研究テーマを変えることはもちろん禁物である。しかし研究者は自分の力で研究を押し進めて行くから、研究内容は日進月歩と変っている筈である。つまり研究のメイン・テーマは変えてはならぬが、サブ・テーマはどんどん変わって行くのが本当だと云えよう。

「演習林年報」が1冊、ついで1冊と机上に重ねられる。そのたびにメイン・テーマをのぞくだけでどの教官の研究かすぐ見当がつけられ、しかも、サブ・テーマに眼を移せば、思わず身を乗り出したくなるような斬新さがのぞかれる。そして、年毎に研究者の研究個性が定着してゆく。そんな研究展開を期待しながら、このような方向への努力を私としては惜しんではならないと考えます。

1977年11月

演習林長 近藤民雄